

国語基礎 問題 2 / 3	キャリア教養学科 生活科学科福祉こども専攻	受付番号	番	氏名
------------------	--------------------------	------	---	----

五 石川啄木の短歌二首を論じた次の文章を読んで後の問いに答えなさい（／は、その短歌がもともと三行に分けて書かれていたことを示します）。

東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる

近代歌人のなかでもっとも愛誦歌の多い歌人はと尋ねられれば、誰もが迷うことなく啄木と答えるだろう。歌集『A』冒頭の一首として、この歌も、日本人なら知らない人は居ないのではないかと思えるほどだ。

青春の B が、現在の目から見るとやや過剰な所作とともに詠われている。特に「われ泣きぬれて／蟹とたはむる」は、さすがに現在では恥しくて詠えないところだろう。しかし、一步引いて考えれば、ある種の愛誦性を獲得するためには、このような過剰なまでに人々の心にベタに訴えかけるような俗性が必要なかもしれない。

総じて、啄木はいわゆる専門歌人からの評価は低い傾向があるが、それはこのような過剰な表現が、世間一般に受け入れられすぎているところに起因するのかもしれない。しかし、歌は（C）に膾炙して、いつも口ずさまれるような一般性を持っていないと、後世に残っていないかないことも事実なのである。あまりにも芸術性、文学性が高くて、一部の人々にしか理解されないといった作品は、多くの場合、時代を越えて生き残る確率が低いと言わざるを得ない。むしろかしい問題である。

啄木の代表歌のひとつでもある「東海の」の一首、意味を取り違える人は、おそらく誰も居ないだろう。単純である。しかし、単純ななかに端倪すべからざる技巧があることはあまり気づかれていない。その一つは、カメラのパン（移動）の仕方である。大きな景から小さな景へ、連続的に移っていくようなカメラワークの最後に、作者が居て、蟹が居る。つまり東海、小島、磯、白砂、そして我と蟹という景が、あたかもカメラのレンズがどんどん絞られていくように D ものへと収斂していくのである。この「E」の使い方は見事である。

（中略）

たはむれに母を背負ひて／そのあまり軽きに泣きて／三步あゆまず

歌意など説明する必要もないだろう。「東海の」と並んで日本人にいちばん知られている歌かもしれない。あまりにも出来すぎた光景ゆえに、鼻白む向きも多いかもしれない。また、この歌では啄木の言いたいことがすべて詠われてしまっており、同業者としては（＊）、本当はこの一歩手前で表現を抑制して欲しかったという気もする。

しかし、この歌が国民的知名度を得てしまったのは、そのような俗性と紙一重のところにある抒情によるのかもしれない。先にも述べたように、あまりにも特殊であったり、感性や思想、自己把握が高度・難解でありすぎると、一般性には届かず、愛誦歌とはなりづらい。文学的な洗練度と、ポピュラリティの獲得という問題は、永遠の F を抱えこんでいる。

この歌が作られた明治四一年（一九〇八）、啄木は、北海道より上京後、小説などによって生活の資を得ようとしていたが、それらはことごとく失敗し、本郷菊坂の下宿屋、赤心館に傷心を養っていた。しかし、その窮乏のなかで却って、歌によって創作意欲がまっとうされることに気づき、この明治四一年が契機となつて、歌における新生面を開くことになった。

生活に行きづまった啄木は、函館に置いてきていた母や妻子を呼び寄せることができない。当然、「母を背負ひて」「三步あゆまず」は事実ではない。虚構である。「東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる」の歌の一連のなかにあることによって、読者はな

国語基礎 問題 3／3	キャリア教養学科 生活科学科福祉こども専攻	受付番号	番	氏名
----------------	--------------------------	------	---	----

んとなく、実際に啄木が母親を背負っている図を想像するが、事実としてはそれはない。

しかし、現実になかったからといって、それが詩として欠陥になるかと言えば、それはまったくない。詩の真実は、現実にあったかどうかとは一対一で結びつけられるべきではない。あくまで読者が、そこに現実³であつても、虚構であつても、作者の真なる思いを感じとれるかどうか、それが作品評価のすべてでありきつてもいいだろう。

遠く離れ、呼び寄せることもできないままに、母を思い、妻子を思う。いずれもこの若い詩人にとって重い存在、⁴ 軛^{くびき}とも感じられる存在だ。自分だけを頼りにして、遠い異郷で、呼び寄せてくれる息子からの便りを待っている母。その母を背負ったならば、年老いた母は、まことに存在感の希薄な **G** さのなかにあるだろう。思うだけでも泣けてくる。そのような啄木の心情が、読者の心にすつと流れこんでくるならば、あるいは啄木のそのときの心情をそのままに受け入れられるならば、この歌は虚構であつてもリアリティという面では本物なのである。

（＊）筆者は啄木と同じく歌人。 永田和宏『近代秀歌』（岩波新書 2013年所収）

五 問一 『A』に入る作品名を次の中から選び記号で答えなさい。

- 【ア 思ひ出 イ 桐の花 ウ 赤光 エ 一握の砂】

問二 **B** に入る語句として最適なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

- 【ア 普遍性 イ 感受性 ウ 感傷性 エ 小児性】

問三 （C）に入る語句として最適なものを次の中から選んでそのまま記しなさい。

- 【人口 世間 文壇 お茶の間】

問四 傍線部1「端倪すべからざる」の意味として最適なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

- 【ア 真似できない イ 測り知れない ウ 見逃してはならない エ 望外の】

問五 **D** には冒頭からここまでの説明文の中の連体詞一つが入る。それを記しなさい。

問六 「E」に入るべきひらがな一字を記しなさい。

問七 傍線部2「鼻白む」の意味として最適なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

- 【ア 興覚めがする イ 馬鹿にする ウ 驚く エ 軽蔑する】

問八 **F** に入るべき語句として最適なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

- 【ア カテゴリー イ トラブル ウ ジレンマ エ テクニック】

問九 傍線部3の筆者の考えについて、文学・芸術（小説・詩歌や絵画、アニメなど）の作品の例を挙げてあなたの意見を1000字程度で述べなさい。

問十 傍線部4「軛^{くびき}」の意味として最適なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

- 【ア 必要なもの イ 支えとなるもの ウ 保護すべきもの エ 束縛するもの】

問十一 **G** には、「たはむれに…」の歌とその説明文の中の漢字一字が入る。その漢字を記しなさい。